

感・発汗・口渇などの熱証に変化する場合である。このときには、白虎加人参湯などが使用される。

## 寒熱真仮：本質と見かけ

寒証（あるいは熱証）が、その病態の本質にもかかわらず、見かけ上、熱証（あるいは寒証）がみられるもの **注2** である。つまりちょっと見た感じと、本当の病態の姿が異なるもの、あるいは逆の病態のものである。これを寒熱真仮<sup>かんねつしんか</sup>†という。一見しておとなしそうだが、じつは熱血漢であるとか、好きな人の前でつい嫌いなそぶりをしてしまうなどにたとえられよう。

本証には、①本質は寒証だが見かけは熱証（真寒仮熱証）のものと、②本質は熱証だが見かけは寒証（真熱仮寒証）のもの2つがある。臨床では、真寒仮熱証がよくみられる。

本証の見極めは、臨床上非常に重要となる。見かけの病態に対してのみ治療を行うと、誤治や副作用出現の可能性が高くなるからである。たとえば本質は寒証なのに、熱証と勘違いして清熱剤を投与するような場合である。

本証では矛盾した症状がみられ、これに着目することが診断の要点となる。

**注2** 東洋医学では、病態の本質を「本」、見かけを「標」という。したがって、寒熱真仮を東洋医学的に述べれば、本は熱証（あるいは寒証）だが、標は寒証（あるいは熱証）の病態となる。

## (1) 真寒假熱証

本質は寒証の病態（真寒）にもかかわらず、見かけ上熱証の症状（仮熱）がみられるものである。臨床では、真熱仮寒証に比べよくみられる。

病態の仕組みは次のとおりである。

健康状態は生体の陰と陽が互いに交流し合って保たれている。寒は陰の、熱は陽の代表的なものである。本証の発症は、重度の寒証と軽度の熱証で起こる。寒（陰）が非常に強いため、弱い陽（熱）が交流できず、逆にはじかれて、上や外側に留まってしまったものが本証である。これを「陰寒、内に盛ん、陽を外に格げる」（陰寒内盛、格陽於外）という。「格」とは、固い物に当たりそのまま留まる、拒絶される、妨げられるなどの意味である。ここから、はじかれ仮熱症状を引き起こす陽（熱）を格陽<sup>↑</sup>という。

嫌な例だが、夫婦間が冷え切り、帰宅しても茶の間に入れられないようなお父さんにたとえられるかも知れない。

### ■症状

一見すると熱証を思わせる症状（仮熱症状）がみられる。しかし、同時に熱証とは言いがたい寒証症状（真寒症状）がみられる。つまり見かけは熱証と思われるが、熱証と判断するには矛盾した寒証症状が出現する。

①**仮熱症状**：臨床上よくみられる仮熱症状には、熱感やほてり感・顔色紅潮・口渴・咽頭痛・身もだえる（煩躁）・大きい脈（洪脈）・速い脈（數脈）などがある。特に上半身の仮熱症状がよくみられる。これを虚陽上浮あるいは戴陽<sup>↑</sup>という。

②**真寒症状**：仮熱症状と同時に真寒症状がみられる。たとえば、身体は熱いにもかかわらず（仮熱症状）、温かい飲食物を好んだり皮膚に触れると冷たい（真寒症状）などである。紅潮は頬部だけで時に消失したり、また唇は白色である。口渴はあるが、水分摂取は少量だったり温水を好む。咽頭痛はあるが咽頭発赤はない。身もだえるが、無気力で倦怠

図 2-55 真寒假熱の症状例

仮熱	真寒
熱感・ほてり感	温性飲食物を好む・温まるとよい・皮膚に触れると冷たい
顔色紅潮	頬部のみ紅潮・時に消失時に出現・白色の唇
咽頭痛	咽頭発赤はない
口渇	少量で満足・温性飲食物を好む
身もだえる	無気力・倦怠感・力のない声
脈洪大や数脈	無力・無根
	【他症状】
	四肢冷感・下痢・淡白舌・肥大舌・寒冷刺激で悪化・温めると良好

感が強く声が弱々しい。洪脈や数脈だが力がない脈（無力・無根<sup>↑</sup>）などの症状である。仮熱症状とともに、これらの症状がみられれば、純粋な熱証とは言い難い。

同時に次のような寒証症状がみられれば、寒証が本質的な病態の可能性が高くなる。すなわち、四肢冷感・下痢・淡白舌・寒冷刺激で増悪し風呂などで温めると調子がよいなどの寒証の症状である。

ここで理解を助けるため、簡単な実例を紹介する。47歳、男性。元来虚弱体質の冷え症で、感冒になりやすく、よく胃がもたれ下痢になりやすかった。1月初旬から感冒となるが、無性にアイスクリームが欲しくなり、一晩に3個も食べてしまうという。しかし、下肢は著明に冷えており、1日3～4回の下痢がみられた。真武湯を投与したところ、軟便は消失し、さらにアイスクリームもいらなくなった。

冷たいアイスが無性に欲しいのは、体が熱をもっているからである。

しかし、元来冷え症で、冬季の感冒で下肢は冷え、下痢があり、アイス以外はすべて寒証状態を示している。つまり寒証が本質的な病態（本）であり、アイスが欲しいのは見かけ上の熱（仮熱）のためである。そのため、清熱剤ではなく、真武湯の投与で効果があったといえる（真武湯については152頁参照）。

### ■治療

陽気を温め、外側の仮熱を内に戻したり、上昇した仮熱を下に降ろし内に戻す（引火帰原<sup>†</sup>）方法をとる。多くは附子・肉桂・乾姜・呉茱萸など温裏薬や補腎陽薬が使用される。

真寒假熱証と思われる病態に適応する方剤もある（表2-10）。そのうちいくつかを述べる。苓桂朮甘湯はめまい・動悸・頭痛などを治療する方剤であるが、時に頭部のほてりの出現をみることがある。本剤の適応病態は寒性の湿気（寒湿）の貯留であるが（真寒）、このほてりは仮熱と考えられる。また麻黄附子細辛湯は体を温めることで寒邪を払うものであり、悪寒・四肢冷感などの寒証症状が適応となる。時に咽頭痛という熱証症状がみられることがあるが、これも仮熱症状といえる。さらに

表 2-10 真寒假熱によく用いられるエキス剤

方剤名	仮熱症状	真寒症状
①温経湯	手掌ほてり・口唇乾燥	四肢冷感
②苓桂朮甘湯	頭部ほてり	めまい・動悸
③五積散	上半身ほてり	下半身冷感・胃弱・寒湿性関節痛
④麻黄附子細辛湯	咽頭痛	悪寒・水様性鼻汁
⑤桂枝加竜骨牡蛎湯	軽度のぼせ	不眠・不安・動悸
⑥小建中湯	四肢ほてり	胃弱虚労
⑦牛車腎気丸	上半身ほてり	腰痛・下肢冷感・下肢浮腫
⑧八味地黄丸	上半身ほてり	腰痛・下肢冷感・夜間尿

八味地黄丸などもほてり・頬部紅潮などの仮熱症状に用いることがある。

上記はいずれも軽い真寒假熱の状態であり、典型的な例は『傷寒論』の通脈四逆湯\*証であるが、これについては成書を参考にされたい。

### 症例 17 | 真寒假熱の頭痛とほてりに苓姜朮甘湯

**症例**：30歳，女性。

**主訴**：下半身の脱力感・冷感。

**現病歴**：元来，冷え症で胃弱であった。2年ほど前から主訴が増悪した。

腰と下肢に重い脱力感と著明な冷感，物がぶら下がったようなジンジンとする感じがある。ひどいと立ってられない。同時に拍動性の頭痛がある。冬季や夏のクーラー，湿気で増悪する。夜間に手足の軽度のほてり感がある。尿は少なく透明。胃腸症状（－）。1993年8月9日初診。

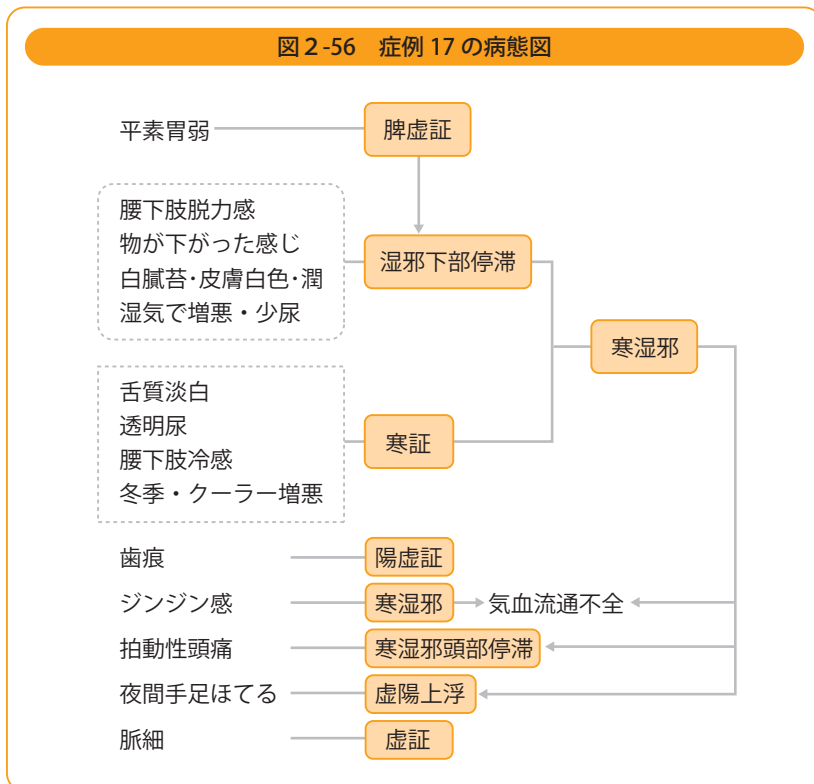
**現症**：身長153cm，体重55.2kg。皮膚白色・湿潤。舌質淡白・歯痕，白膩苔。脈細。

**経過**：苓姜朮甘湯エキスを7日間投与したところ，主訴の頭痛は著明に改善した。夜間のほてりは変わらない。そこで上方に炮附子末0.5gを加えて投与したところ，ほてりの改善をみた。

**解説**：本例の特徴は冷え症もさることながら，頭痛と夜間に軽度のほてり感があることにある。本例には物がぶら下がったような下肢の冷え症があり，これは苓姜朮甘湯の特徴的な症状であり，適応病態であったことは疑いない。

それではなぜ頭痛とほてりが出現したのだろうか。冬季やクーラー，そして湿気で悪化する頭痛であることからすると，痰湿が頭部に上昇して頭痛が出現したのであろう。附子を加えることでほてりが軽減していることから，寒証によるものであると考えられよう。夜になると，熱つまり陽気は陰へと帰る。しかし，寒性の痰湿が下肢に貯

図 2-56 症例 17 の病態図



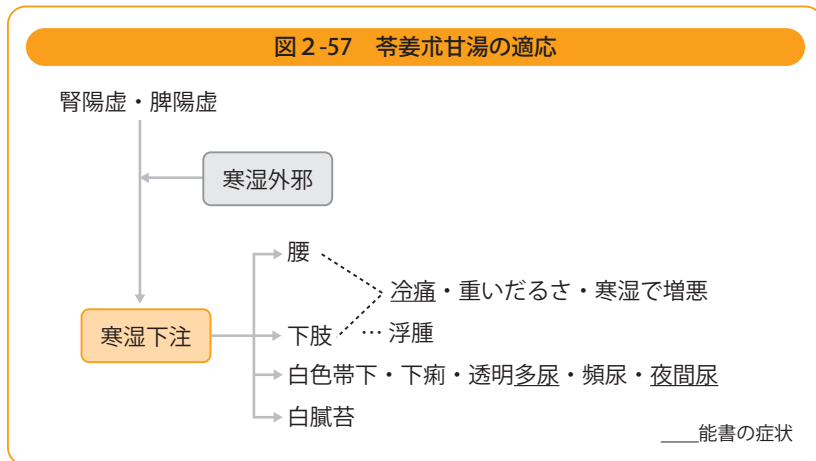
留し、非常に強いものであった。そのため、陽気ははじかれてしまい、上昇してほてりが出現したと考えられる。いわゆる虚陽上浮である。

長く放浪した夫が家族の元へ帰ってみると、妻と子供たちの結束は固く、夫の座る椅子さえペットの犬に占領され、居場所を失った夫はすどすどとまた放浪の旅へと出る。こんな状況にたとえられようか。  
 (『東静漢方研究室』31巻6号, 2008)

### ■ 苓姜朮甘湯について

本剤は消化機能低下（脾虚）や腎虚のために、寒性の水分（寒湿）が

図 2-57 苓姜朮甘湯の適応



下半身に停滞し（寒湿下注<sup>†</sup>），下肢の重だるさや強い冷え・浮腫・下痢・多尿・夜間尿などが出現した病態に使用される。特に水中に座ったような下肢の冷え，重いものがぶら下がったように下肢の重だるさを特徴的な症状とする **注**。いわゆる着痹<sup>†</sup>（著痹）の治療剤である。消化機能を高め，下半身に停滞した寒湿を温め除く効能がある。

**注** 苓姜朮甘湯の出典には、「腎著（着）之病，其人身体重腰中冷，如坐水中，形如水状，反不渴，小便自利，飲食如故，病属下焦，身劳汗出，衣裏冷湿，久久得之，腰以下冷痛，腰重如带五千钱，本方主之」（『金匱要略』五臟風寒癰聚病脈証并治）とある。

## (2) 真熱仮寒証

本質は熱証の病態（真熱）にもかかわらず，見かけ上，寒証の症状（仮寒）がみられるものをいう。この病態の仕組みは以下のとおりである。

体内に熱が鬱し停滞しているために，気が外側や四肢末端まで届かなくなり，四肢末端などが寒証となる病態である。つまり，陽気が内に閉